



## ヨーロッパの市電

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねたか



昨年の春、スイスの都市チューリッヒを訪れました。十六・七世紀からの美しい町であることは皆様御存知と思いますが、その古い町並みには市電が縦横に走っていて市民の足として活躍しています。ホテルの近くまで乗ろうと市電の到着を待っていましたら、並んでいる方から

「乗車する前に切符をお買いなさい」と

と注意され、歩道に設置されていた自動販売機で目的地までの切符を買って乗り込みました。しかし切符を調べる車掌さんがいる訳でも無く、その儘目的地で降りましたが、見ていると降りた人達が切符を肩籠にポイと捨ててサッサと歩いて去って行きました。

如何にスイス人の公衆道徳精神が高いとしても、これでは無賃

乗車が続出するのでは？と思議に思ったのですが、よく聞いて見ますと時々突然に一斉検査が行われ、切符を持っていないと数万円の罰金が科せられ、さらにその人の名前が公表されるようで、成程と思いました。全車に車掌さんを配備するよりは遙かに低コストであることは明確です。

昭和三十年代迄は日本中の都市に市電が走り、市民の足として愛されていました。自動車が普及して来ましたが、自動車を消してしまいました。町並を見ながらゆつたりと走る市電の楽しみは忘れられませんか、前号で書きました老齢化問題に加えて、本格的な省エネの時代には最も求められる公共の交通手段です。今でも市電の走っている数少ない町は多くの観光客に

人気があることも考えますと、市電の復活も決して考えられない事ではないと思っています。

チューリッヒは戦災に遭わなかった町ですが、ドイツの多くの都市は徹底的に破壊されました。しかし街の中心の教会や市庁舎は殆ど何十年もかけて普通通りに再建され、何世紀も前の姿に復元されて、その古い歴史を誇ります。

大体ヨーロッパ人はアメリカ文明が大嫌いなところが有ります。アメリカより遥かに古い歴史を持つている私達日本人ですから、私達の生活の中にもっともっと日本本来の生き方や考え方、生活の技術があつて、生き生きとその伝統が生きている、ということがこれから大変に大切になって行くように思います。



昭和27年12月、静岡市役所前を走る路面電車。旧静岡市では昭和37年、旧清水市では昭和50年に廃止。(写真撮影：海野幸正氏)